

「陣ノ内城跡」国史跡記念シンポジウム
「甲佐の財の魅力を探る」

記念講演 「地域史のなかの陣ノ内城」
講師 熊本大学永青文庫研究センター長 稲葉 継陽 氏

基調講演 「指定、そして保存活用へ」
講師 文化庁文化財第二課主任調査官 近江 俊秀 氏

パネルディスカッション コーディネーター
国立歴史民俗博物館名誉教授 小野 正敏 氏



「陣ノ内城跡」国史跡記念シンポジウム

この秋、本町初となる国史跡となった「陣ノ内城跡」。この城跡は、肥後国内の中世城郭として突出した規模を持ち、阿蘇氏から豊臣系大名による支配への転換期における政治的、社会的状況を考える上で重要なものとして評価されています。

11月13日（土）町および町教育委員会では、この新しい国指定史跡の誕生を記念したシンポジウムを開催しました。陣ノ内城跡を通してこのまちの歴史をひも解きながら、現代へとつながる先人たちの暮らしに思いを巡らせてみましょう。

■国指定史跡「陣ノ内城跡」の歴史的価値

陣ノ内城跡は、6月18日（金）国の文化審議会が文部科学大臣に対して国指定文化財「史跡」に指定するよう答申し、10月11日（月）の官報告示をもって正式に国史跡となりました。

県内の文化財が国指定史跡となるのは、平成26年指定の八代城郭群（八代市）以来7年ぶり。城郭に限れば、熊本城（熊本市）、人吉城跡（人吉市）、宇土城（宇土市）、田中城（和水町）、堅志田城（美里町）、佐敷城（芦北町）、棚底城（天草市）、八代城郭群（八代市）に次ぐ9番目です。

町社会教育課の上高原聡参事は、シンポジウムの冒頭で、これまでの調査などから明らかとなった陣ノ内城跡の歴史的価値について、

- ① 肥後国でも突出した規模を持ち、小西行長の城郭に見られる大規模な堀などの保存状態が良好
 - ② 緑川を活用した水陸交通の要衝にあり、土器の出土状況をしても阿蘇氏の時代から継続的に利用
 - ③ 阿蘇氏から豊臣系大名に転換する際の統治方法の変化の1つを示す
- ことなどを説明しました。町では、今後、この史跡の保存と活用に向けた計画づくりを住民の皆さんの意見も集めながら進めていきます。

新たな宝をこのまちの
元 気 に つ な げ る

町社会教育課
後藤 喜治 課長



町教育委員会では、国指定天然記念物「麻生原のキンモクセイ」（昭和9年指定）以来87年ぶり2件目の国指定文化財となった国史跡「陣ノ内城跡」の魅力を伝えるためにPR動画を作成中です。私たちの暮らしに息づいている緑川流域の歴史や文化とともに、このまちの宝となった陣ノ内城跡の歴史的価値を広く発信しつつ、その保存と活用を通してまちの元気につなげていきます。

●お問い合わせ先
町教育委員会社会教育課 ☎096-234-2447

陣ノ内城跡の魅力を探るシンポジウム

今回のシンポジウムでは、これまでの調査で指導いただいた先生に陣ノ内城跡の魅力や活用について講演いただきました。ここでは、注目を集めた記念講演の一部をご紹介します。

なお、シンポジウムの様子は、町公式ウェブサイトで近日公開予定です。併せてご覧ください。



【記念講演】
地域史のなかの陣ノ内城

熊本大学永青文庫研究センター長
稲葉 継陽 さん

2008年から陣ノ内城跡調査専門委員を務める。元新甲佐町史編集委員。領国支配の成立過程を追求。また、熊本藩主細川家に伝来した織田信長文書や近世初期藩政史料などの研究に取り組む。

■甲佐を中心とした地域史のなかの陣ノ内城

甲佐を代表する史跡となった「陣ノ内城跡」。この文化財を適切に活用していくためには、この地域の文化資源との歴史的関連を把握し、理解を深めることが必要です。

甲佐神社や鶴ノ瀬堰、鮎築などが点在し、「阿蘇家文書」や「永青文庫細川家文書」などの古文書の記録も豊富な甲佐は、歴史文化資源のポテンシャルが高い地域と言えます。甲佐神社が緑川流域の勢力と結びつき、益城地域（旧下益

■益城郡の山と海をつなぐ甲佐神社

甲佐の地域史を語るために欠かせないのが、緑川と甲佐神社の存在です。平安末期に益城郡木原（熊本市富合町）を本拠地とする木原氏をはじめとした緑川流域の在地領主が「当国第二宮」甲佐大明神へ寄進を行うことで、甲佐神社は崇敬を集めていきました。



▲益城地域の鎮守を担ってきた甲佐神社

この社には緑川を通じて多くの供物が搬入されていたと考えられます。

鎌倉期の甲佐社直轄領は、港の小川（宇城市小川町）などに加え、それらの港と甲佐をつなぐ要所の海東（宇城市小川町）や堅志田（美里町）に分布。海の供物が甲佐神社に運ばれ、山の供物と交わる交易の核となった甲佐が見えてきます。また、竹崎（宇城市松橋町）の御家人だった竹



国立国会図書館デジタルコレクションより

▲竹崎季長が甲佐神社に奉納した『蒙古襲来絵詞』

崎季長が「蒙古襲来絵詞」を甲佐神社へ奉納し、幕府から海東郷を給与されたことへの感謝を示したのも、甲佐神社が13世紀の在地領主に崇敬・保護されていた典型です。

■内乱期・戦国期の益城地域の中心だった甲佐

14世紀に益城郡一帯を勢力圏とした阿蘇氏の恵良惟澄が本拠地の甲佐を中心に合戦を繰り広げたことから、郡内における甲佐の経済的・政治的地位は不動のものだったと言えます。16世紀中ごろになると矢部（山都町）を本拠地とする阿蘇氏の家臣団が益城郡一帯に拠点を築きます。戦国時代の甲佐は、矢部の本拠を維持しながら甲佐社領を核に益城郡一円の支配を目指す阿蘇氏にとって最重要地域となりました。

■小西行長の朝鮮出兵と陣ノ内城の築城

16世紀後半、朝鮮出兵を見据えて肥後に配置された加藤清正と小西行長にとって、八代海や有明海沿岸の港町支配は必須でした。八代・益城・宇土・天草を治めた行長は、加藤領との境界に位置する川尻港と緑川の水運を重要視。

矢部から川尻に至る緑川一帯の支配を強めるために、流域の中間点であり河川交通の要衝だった甲佐の地に大規模城郭・陣ノ内城を築城したと考えられます。

■加藤清正の治水事業と明治時代の近代化

その後、甲佐を統治した加藤清正は、緑川の流路制御と鶴ノ瀬堰の設置および水路整備を進めます。現在も大井手川として残るこの水路は物資輸送に活用され、岩下地区の発展につながりました。

明治になると、鶴ノ瀬堰で取水した水を利用する、西日本で最大かつ最初の製糸工場「緑川製糸場」が設置されます。日本初の官営富岡製糸場に遅れることなくわずか3年のできごとです。

■甲佐の文化歴史の象徴としての陣ノ内城

これまで見てきたように、甲佐の地は、中世・近世を通じて、益城郡の経済・宗教・政治（戦乱）の中心地でした。そこに築城された陣ノ内城は、豊臣政権による朝鮮出兵をも象徴するものです。甲佐の地域史を实地で学び、楽しむための整備と活用が大切です。